

【佳作】

都市小説として読む梶井基次郎「泥濘」

国際日本学部 日本文学科3年

来村 尚紀

はじめに

主人公の奎吉は、かなり根詰めて執筆していた小説を失敗に終わらせてしまう。この創作の失敗が、奎吉の生活に悪影響を及ぼす。書こうとしても書けない、街に出て気分転換をしようとするも、お金がない。そんな状態の奎吉の元に、実家から為替が届く（第1章）。早速、奎吉は「気持の転換を求めて」下宿から街に出掛ける。銀行で為替を現金に替え、散髪屋に入り、友人宅で雑談をする。古本屋を巡り、日用品や食品を買い込み、ビールを飲み、高価な石鹸を買う（第2章）。高価な石鹸の購入を契機に、奎吉は自らを省み、母を追憶する。そして、下宿への帰路で、自身の影が「生なましい自分」（ドッペルゲンガー）として現れる。奎吉は、眩暈を起こし、不安を感じるが、「生なましい自分」は「しみじみした自分」に帰り、下宿へと歩を進める（第3章）。

大正14年7月1日発行の同人誌『青空』第五号に掲載された梶井基次郎「泥濘」は、先述した作品の梗概通り、創作に失敗した奎吉が、気持ちの転換を求め、街で遊歩と消費を行う物語である。

これまでの「泥濘」研究の多くは、古閑章が「心的鬱からの脱出のテーマが作品の要」¹と論じたよう

に、①主題としての不安や自己認識、ドッペルゲンガーなどの作品論的な検討²、あるいは、二宮智之が「梶井の実生活に材を得たと思われる部分が多く見られる。」³と論じたように②作品から梶井の持つ感覚・思考を辿るなどの作家論的検討⁴を試みたものであった。

つまり、「泥濘」の先行研究の多くは、どれも主人公の内面、あるいは、著者である梶井基次郎にフォーカスを当てるといような類似したテーマから立論されており、「泥濘」の都市小説的な側面は、あまり触れられてこなかった。

もちろん、この都市小説的な側面についても、石原千秋が、物語の舞台設定や奎吉と他者との交流という点から部分的な検討・考察をおこなっているが⁵、「消費」という奎吉の都市生活者的な行動については、触れられていない。しかし、都市小説である本作品においては、舞台としての「都市」と奎吉の行動としての「消費」が決定的に重要である。

そこで、本稿では、「泥濘」が都市小説であることを通じて、「泥濘」の中核部とは一体どのようなものなのか検討し、明らかにしていきたい。

1 古閑章「『泥濘』と『路上』」（『近代文学論集』昭和59年11月）25－33頁

2 吉岡真緒「梶井基次郎『泥濘』論―「ある」ことのへだたり―」（『日本文学論究』平成15年3月）84－92頁、鎌田廣己「梶井基次郎における転倒・転位―『泥濘』および『路上』」（『阪神近代文学研究』平成7年7月1－14頁、参照）。

3 二宮智之「梶井基次郎『泥濘』論―成立過程と草稿からの再考―」（『近代文学試論』平成17年12月）33－47頁

4 西尾玲「梶井基次郎『泥濘』―私小説と「見る」こと―」（『語文論叢』平成3年3月）63－72頁、桐山金吾「梶井基次郎論―『泥濘』の成立とその位相」（『國學院雑誌』昭和55年12月）66－74頁、天沢退二郎「梶井基次郎の体内時計―『泥濘』『冬の日』―」（『国文学 解釈と教材の研究』昭和63年12月）28－33頁、参照。

5 石原千秋「この名作を知っていますか―近代小説の愉しみ（6）眩暈のような自意識―梶井基次郎『泥濘』」（『文蔵』平成21年4月）429－442頁

1. 「物語の舞台」の役割

先述したように、先行研究では奎吉の心情や他者との交流ばかりが注目されてきた。しかし、「泥濘」では、人間関係や心情よりも、舞台こそが重要である。なぜならば、奎吉はこの十数頁という作品の中で複数回に渡り舞台を移動しているからである。しかも、この移動がなければ、他者との交流も心情変化も起きない。奎吉が舞台を移動するからこそ、物語が進行していくのである。

第1章の舞台である下宿について、宮本恵美子は「下宿は、言うまでもなく生活の場である」⁶と論じている。本稿も、この生活の場という認識には同意見である。しかし、それと同時に奎吉にとって下宿は、本文に「かなり根をつめて書いたものを失敗に終らしていた」とあるように、執筆（労働）の場である。一方、第2章の舞台である街は、本文に「自分は何かに気持の転換を求めている」とあるように、奎吉にとって気分転換の場である。また、奎吉にとって都市とは購買の場である。こうしたことについては、石原千秋も、「それは、奎吉が労働者ではなく消費者だということ」だと指摘した上で、「労働者にとって都市とは働く場所」であり「消費者にとって都市は買い物をする場所」⁷だと論じている。

このように、消費者である奎吉にとっては、家が労働の場所で、街が消費の場所である。つまり、奎吉が消費行動をするには、前提として、労働の場所である家だけでなく、消費の場所としての街（「都市」）という舞台が必要であるのだ。

2. 奎吉の「モノ的消費」

では、奎吉は、「都市」で、どのような消費行動をしているのだろうか。「泥濘」では、大きく分け

て2種類の消費行動が書かれている。1つは、生活に必要な不可欠なモノの購入（＝モノ自体を手に入れることが目的である「モノ的消費」）、もう1つは、生活に必要な不可欠ではないモノ（贅沢品）の購入（＝モノ自体よりも、そのモノに付随する贅沢という記号に意味がある「記号的消費」）である。

また、ここで、「記号的消費」の補足として、社会学者・哲学者であるジャン・ボードリヤールの消費社会論を参照しておきたい。もちろん、ボードリヤールの消費社会論は、「泥濘」発表から45年後の1970年に、フランス・パリの近代化を受けて発表されたものであり、「泥濘」とはかなり時差がある。しかし、「泥濘」が、消費社会の到来を、「感覚的」に捉えて書かれたものであるのに対して、ボードリヤールの消費社会論は、「泥濘」に描かれているような消費社会を「理論的」に説いたものである。それゆえ、「泥濘」に書かれた都市生活を十分に説明可能なのである。

ボードリヤールは『消費社会の神話と構造』の中で、消費を以下のように定義している。

- (1) 消費はもはやモノの機能的な使用や所有ではない。
- (2) 消費はもはや個人や集団の単なる権威づけの機能ではない。
- (3) 消費はコミュニケーションと交換のシステムとして、絶えず発せられ受け取られ再生される記号のコードとして、つまり言語活動として定義される。⁸

ボードリヤールの消費社会論によると、人はモノをコミュニケーションのような単なる社会的記号として消費している。つまり、「記号的消費」においては、モノではなく、モノに付随した記号（ex. 贅沢、希少、最新など）を購入している（1）。そして、

6 宮本恵美子「梶井基次郎『泥濘』論—奎吉の挫折感と作品世界—」（『文月』平成10年7月）28頁

7 注vに同じ、432頁

8 ジャン・ボードリヤール／今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』新装版（紀伊國屋書店 平成27年9月）142頁。なお、矢部謙太郎『消費社会と現代人の生活—分析ツールとしてのボードリヤール』（学文社 平成21年8月）も参考にした。

その記号と他の記号の差異が、ある種のコミュニケーションとして機能し、自己と他人の差異化に繋がる(3)。つまり、モノに付随した記号のやり取りから差異が発生し、それを交換するシステムというのが、ボードリヤールの示した消費社会論であり、「泥濘」で描かれている「記号的消費」なのである。

また、「モノ的消費」では、モノ自体に意味があるため、自身の権威や階級の象徴として消費(モノの入手)が機能している場合があるが、「記号的消費」においては、モノ自体に意味がないため、権威づけ機能としての消費は成立しないのである(2)。

そして、ここでの、「モノ」とは、単なる物質の意味ではなく、金銭を対価に手に入れる無形(=サービス)・有形商品のことである。

第2章で、街を遊歩する奎吉は、はじめに「消費」を行うために必要な現金を手に入れようとする。

待つてゐた為替が家から届いたので、それを金に替へかたがた本郷へ出ることにした。(中略)銀行へ着いた時分には自分もかなり不機嫌になつてしまつてゐた。(中略)係りは自分の名前をなかなか呼ばなかつた。少し愚図過ぎた。小切手を渡した係りの前へ二度ばかりも示威運動をしに行つた。たうとうしまひに自分は係りに口を利いた。小切手は中途の係りがぼんやりしてゐたのだつた。

この場面で、奎吉は、生活・買い物をする現金を手に入れるために必要な為替の換金手続きを行っている。現金が買い物に必要であることは言うまでもない。しかし、この場面を注視すべき理由は、それだけではない。係りが愚図で、奎吉の想定以上に手続きに時間がかかったことで、銀行についた時点で沈んでいた奎吉の気持ちちが、更に沈んだのである。ここで、奎吉の気持ちちが沈んだことは、後に取り上げる奎吉の消費行動に強く影響する。また、奎吉の気持ちちの落ち込み具合は次の場面で更に増す。

自分はその足で散髪屋へ入つた。散髪屋は釜を壊してゐた。自分が洗つて呉れと云つたので石鹸で洗つておきながら濡れた手拭で拭くだけ

のことしかしない。これが新式なのでもあるまいと思つたが、口が妙に重くて云はないでゐた。然し石鹸の残つてゐる気持悪さを思ふと堪らない氣になつた。訊ねて見ると釜を壊したのだといふ。そして濡れたタオルを繰返した。金を払つて帽子をうけとるとき触つて見るとやはり石鹸が残つてゐる。なんとか云つてやらないと馬鹿に思はれるやうな氣がしたがやめて外へ出る。折角氣持よくなりかけてゐたものと思ふと妙に腹が立つた。

この場面で、奎吉は、身なりを整えるための散髪という形のないモノ(=サービス)を購入している。ここでは、散髪で自分の満足するサービスを受け取れなかったことで、奎吉の気持ちちの落ち込み具合が増している。

では、銀行・散髪屋で、奎吉の気持ちちの落ち込み具合が増した根本的な原因はなにか。それは、奎吉の想定よりもサービスの質が低かったこと、金銭の対価としてのモノの受け取りができないことが原因である。奎吉は金銭の対価を払つたにも関わらず、モノの受領という物質的充足、想定通りに物事が運ぶという精神的充足のどちらも享受することが、できなかった。それゆえに、奎吉は、この後、日用品や嗜好品など物質的充足が確約されている消費行動を立て続けに行う。以下は、その消費行動を行う場面である。

郵便局で葉書を買つて、家へ金の札と友達へ無沙汰の詫を書く。(中略)古本屋と思つて入つた本屋は新しい本ばかりの店であつた。(中略)仕方なしに一番安い文芸雑誌を買ふ。なにか買つて帰らないと今夜が堪らないと思ふ。その堪らなさが妙に誇大されて感じられる。誇大だとは思つても、さう思つて抜けられる気持ちではなかつた。(中略)足袋を一足買つてお茶の水へ急いだ。(中略)お茶の水では定期を買つた。

ここで、奎吉は、2種類の買い物をしている。前述したとおり、1つは生活に必要な不可欠なモノの購入(=「モノ的消費」)、もう1つは、生活に必ずし

も必要ではない贅沢品の購入（＝「記号的消費」）である。

最初の購買品である葉書は、判断が分かれるところではあるが、自分の周囲との関係を良好なまま維持し、生活に障害がないようにするためのものと考ええると、生活に必要なモノ、必需品といえる。また、友人に詫びを書くには葉書というモノが必要である点から、モノ自体に意味があるといえる。そして、足袋と定期も、葉書と同様に、生活必需品の部類であり、これらのモノ自体に目的がある。したがって、これらは、「モノ的消費」である。

しかし、文芸雑誌はどうであろうか。これについては、本文にも「なにか買って帰らないと今夜が堪らないと思ふ。」と書かれているように、奎吉には、文芸雑誌でなくとも、夜を越すための「なにか」が必要であった。つまり、文芸雑誌の購入は、夜を越すためのモノ自体を手に入れることに意味がある「モノ的消費」であるが、それと同時に、娯楽で楽しむためのモノ（＝奢侈品）という「記号的消費」の側面も持ち合わせている。

そして、奎吉の「なにか」を「買って帰らないと今夜が堪らない」と思う気持ちは、文芸雑誌を買うことで収まっているはずだ。

しかし、奎吉はこの後、更に「記号的消費」行動を続ける。一体それはなぜか。それは、「モノ的消費」で物質的充足は得たが、たった1回の「記号的消費」では、まだ精神的充足を得ることができていないからである。

3. 奎吉の「記号的消費」

舞台は変わって、奎吉は銀座に歩を進める。安藤更生『銀座細見』において、銀座は「幸福な街である。ここには美しきもの、新しきもの、香り高きもの、高雅なもの、選ばれたものが集められている」⁹と述べられているように、日本有数の高級商業地である。ここで、奎吉は、まず、「茶や砂糖、パン、牛酪」などを買っている。以下はその場面である。

有楽町で途中下車して銀座へ出、茶や砂糖、パン、牛酪などを買った。人通りが少い。此処でも三四人の店員が雪投げをしてゐた。堅さうで痛さうであつた。自分は変に不愉快に思つた。疲れ切つてもゐた。一つには今日の失敗り方が余りひど過ぎたので、自分は反抗的になつてしまつてゐた。八銭のパン一つ買つて十銭で釣銭を取つたりなどしてしきりになにかに反抗の気を見せつけてゐた。聞いたものがなかつたりすると妙に殺気立つた。ライオンへ入つて食事をする。身体を温めて麦酒を飲んだ。

これらを、高級商業地である銀座で買っている時点で高価であることは明白であるが、砂糖やパン、バターなど洋風な食品、ただの食料品ではなく高価な食料品という点でも奎吉が贅沢をしていることがわかる。もちろん、食料品が生活必需品（「モノ的消費」）であることは間違いないが、高価なモノである必要はない。この意味で、奎吉のこれらの購買品は、生活必需品というよりは、贅沢品（「記号的消費」）に位置づけることができる。その後、ライオンにて、食事と共に麦酒を嗜んでいるが、この麦酒は言うまでもなく嗜好品、すなわち贅沢品（「記号的消費」）である。

そして、これだけ消費行動を立て続けにおこなった奎吉だが、彼の「記号的消費」行動はまだ終わらない。彼はまだ精神的充足を十分に得ていないのだ。

ライオンを出てからは唐物屋で石鯨を買つた。ちぐはぐな気持はまた何時の間にか自分に帰つていた。石鯨を買つてしまつて自分は、なにか今のは変だと思ひはじめた。はつきりした買ひ度さを自分が感じてゐたのかどうか、自分にはどうも思ひ出せなかつた。宙を踏んでゐるやうにたよりない気持であつた。（中略）石鯨は自分にとって途方もなく高価い石鯨であつた。

9 安藤更生『銀座細見』（中央公論社 昭和52年9月）23－24頁

本場面で、奎吉は「自分にとって途方もなく高価い」とあるようにその高価さを自覚する程、高い石鹸を購入している。しかし、「はつきりした買ひ度さを自分が感じてゐたのかどうか、自分にはどうも思ひ出せなかつた」とあるように、奎吉が、強くこの石鹸を購入する必要性を感じていたかは曖昧である。更に「宙を踏んでゐるようにたよりない気持」とあることから、奎吉自身が、自分の選択に自信が持てず、自分の気持ちを把握しきれていないことがうかがえる。また、石鹸が必要であったとしても、生活に必須かどうかの観点からみても、それは高価である必要はない。したがって、石鹸も贅沢品（「記号的消費」）に分類することができる。

ここで、先ほどから多用している「贅沢」の定義を改めて明確にしておきたい。「贅沢」とは、必要以上に金銭などを費やす消費行動というのが通説的な理解である。この定義に即して考えると、奎吉の購入品の中で、必需品（「モノ的消費」）は、はじめに購入した葉書、定期、足袋のみで、他は全て贅沢品（「記号的消費」）である。

では、なぜ奎吉はわざわざ贅沢品を選択、つまり、必要以上の消費をしたのか。

贅沢品の購入と、前章で触れた生活必需品の購入とでは、消費の形式が全く異なっている。繰り返しになるが、前章で触れた生活必需品の購入に関しては、そのモノを入手することに目的があるので、モノ自体に意味がある「モノ的消費」であった。一方で、贅沢品の購入は、そのモノ自体は大して重要ではない。モノに付随した贅沢という記号を手に入れ、それを他者（＝自分以外の消費者）にオープンにする。これにより、発生する自分と他者との差異から、自己のアイデンティティを生成することで、精神的充足度を高めることに目的がある「記号的消費」である。

更にいえば、「モノ的消費」と違って、「記号的消費」は限界がない。なぜなら、モノを受け取ることは、キャパシティが決まっているため限界があるが、記号を受け取ることは無限にできるからだ。また、限界がないということは、いくら買っても満足しない（物質的な充足ではなく、精神面での満足の意味）といえる。だから、奎吉の「記号的消費」行

動は文芸雑誌から石鹸まで止まることなく続く。

そして、奎吉が、「記号的消費」行動の中で、贅沢品を選択しているのは、いくら消費しても満足することはないが、高価という記号が付随したモノを買うことで、贅沢しているという自分のアイデンティティを生成し、少しでも精神的な充足感を高めようと試みているからである。

では、奎吉はなぜ充足感を高める必要があったのか。それは、先述したように「気分転換」をする必要があったからであり、日常的にしているような「モノ的消費」では「気分転換」になりえなかったからである。

しかし、この充足感も一時的なものでしかない。なぜなら、繰り返し述べているように、「記号的消費」には限界がないからである。

そして、消費を行う空間である「都市」は、消費者である奎吉に、鬱屈とした気持ちを紛らわすための消費を促す舞台であり、この舞台がなければ、奎吉は、一連の消費行動を起こせないことについては、1.「物語の舞台」の役割で述べた通りである。しかし、「都市」が担う役割はこれだけではない。

「都市」は、消費者に、さまざまな自由を提供する。これは、どういうことか。奎吉は、作品内で贅沢品や高価という記号を立て続けに手に入れている。しかし、これらの記号以外にも、例えば、最新やトレンドなど、モノには、多種多様な記号が付随していて、消費者は、これらを自由に選択することができる。そして、この「都市」では、奎吉は不特定多数の消費者の一人であり、他者から、奎吉の消費行動の裏にある、創作活動の失敗や、気分転換という目的など、個人の事情が認識されることはない。前章で触れたボードリヤールの消費社会論のように、「記号的消費」によって手に入れた記号でしか、他人との差異を示すことができない。つまり、奎吉は、「都市」という舞台上では、自分を縛る様々なアイデンティティから解放されるのだ。

ここで補足しておく、ここでのアイデンティティは、前章で触れた、「記号的消費」によって生成されるアイデンティティとは全く異なり、鬱屈とした気分や仕事での失敗、作家など下宿での自分を表すアイデンティティである。つまり、アイデンティ

ティにはプラスとマイナスの両面があるのだ。

以上のように、無限に存在する記号を自由に選択できる点、自分を縛るアイデンティティというしがらみから自由になれる点で、「都市」は消費者を自由にするといえる。

では、街を出て下宿への帰路へと歩みを進める奎吉は、どうなったのだろうか。

4. 都市と消費

第3章、下宿への帰路で奎吉は、いわゆる自己分裂を起こす。奎吉は、なぜ自己分裂を起こしたのか。このことを明らかにするため、前章で取り上げた「記号的消費」行動から分析を試みたい。以下は自分の影の中に、もう1人の自分を見出し、それが元の自分に帰り、その後、下宿までの帰路を辿っていくという場面である。

影の中に生き物らしい気配があらはれて来た。何を思つてゐるのか確かに何かを思つてゐる——影だと思つてゐたものは、それは、生なましい自分であつた！ 自分が歩いてゆく！そしてこちらの自分は月のやうな位置からその自分を眺めてゐる。地面はなにか玻璃を張つたやうな透明で、自分は軽い眩暈を感じる。「あれは何処へ歩いてゆくのだらう」と漠とした不安が自分に起りはじめた。……（中略）自分はしみじみした自分に帰つてゐた。風呂屋の隣の天ぶら屋は未だ起きてゐた。自分は自分の下宿の方へ暗い路を入つて行つた。

ここで注目すべき点は2つだ。1つは「生なましい自分」が誕生したこと。もう1つは、それが「しみじみした自分」に帰っていき、「下宿の方へ」と戻っていったことである。

なぜ、「生なましい自分」が誕生したのだろうか。「生なましい」という我々は、「生き生きとしている、今できたばかりである」（『日本国語大辞典』）といったイメージを抱く。つまり、「生なましい自分」は、消費により、鬱屈とした気分を忘れ、自分を縛

るしがらみから解放された自由な状態である。しかし、奎吉はすでに街を出て、自分を鬱屈とした気分へと追い込んだ下宿へと歩みを進めている。つまり、「生なましい自分」は、下宿に歩みを進める意志に反して、それと同時に奎吉の中に存在する、あの鬱屈とした気分をまた味わいたくない（＝下宿には戻りたくない）という意思の表れであるのだ。奎吉の中で、相反する2つの感情が発生し混乱したため、それが自己分裂という形で具現化したのだ。どちらが本当の自分の感情であるのかは奎吉にも分からない。つまり、奎吉は、自分を見失っている状態である。

なぜ、ここで奎吉は自分を見失っているのか。それは、前章で説明したとおり、「都市」は消費者を自由にするからである。「都市」の労働者は、奎吉を1人の消費者としてしか認識しないように、「都市」は、奎吉を縛るアイデンティティから解放する。これは裏を返せば、自分というアイデンティティを失い、消費者として均一化されることでもある。つまり、奎吉は、「都市」で遊歩と消費をした結果として、自分を見失ってしまったのだ。

では、この「生なましい自分」は、なぜ、すぐに「しみじみした自分」に戻っていったのだろうか。

それは、奎吉が自分を取り戻すためである。先述したように、この時の奎吉は自分を見失っている状態である。そして、これは「都市」が人を自由にするからである。一方、「1. 物語の舞台」の役割で述べたように、奎吉にとって、下宿は労働の場である。ここでは、奎吉に自由はない。ただ労働をする他ない。つまり、奎吉にとっての下宿とは、自分が何者か（例えば、作家である、前の創作活動が失敗に終わったことなど）を思い出させてくれる場所でもあるのだ。だから、「生なましい自分」は、失った本当の自分を取り戻すために、下宿に歩みを進める「しみじみした自分」へと、自己回帰していったのである。

以上のように、鬱屈とした気分を紛らわす「記号的消費」をするため、奎吉は「都市」に繰り出し、そこで、気分を紛らわす一方で、自己を喪失する。そして、自己の回復のために、再び下宿へと戻る……。

この場面について、石原千秋が、「奎吉は、きつとまた同じことを繰り返す」¹⁰と論じているが、これだけでは「泥濘」に描かれている複雑なサイクルを理解することはできない。

繰り返されるのは、自己の喪失と回復だけではない。下宿での生活から街での消費と遊歩まで、奎吉は、本作品で描かれている一連の出来事全てを繰り返していくのだ。なぜなら、奎吉は、都市生活者でもあり、それゆえ「都市」と「記号的消費」なしでは生きていけないからだ。つまり、奎吉は、鬱屈な気持ちを抱いた時、また街に繰り出し、「記号的消費」をするはずである。

終わりに

ここまで、本稿では、奎吉の消費行動を視座として、本文分析をおこなってきた。奎吉の内面について触れているという点では、先行研究で論じられてきた奎吉の心情と一見同じである。しかし、消費行動と都市に視座を置き、その上で、包括的に「泥濘」を捉え直すという点で、根本的に、本稿は、先行研究とは異なっている。

このように奎吉の消費行動に注目して「泥濘」を捉え直したことで、日常的なモノ的消費に加え、過剰な「記号的消費」を行い、物質的・精神的な充足を満たすという一連の行動から、奎吉が典型的な都市生活者であることが明らかになった。つまり、「泥濘」には、奎吉を通して、都市生活者が気分転換を目的としておこなう「都市」での「記号的消費」が書かれている。この点で、やはり「泥濘」は都市小説である。また、都市小説として「泥濘」を読み解くことによって、はじめて、作品全体の意味を捉えることができる。

そして、本稿では、「泥濘」が都市小説であることを通して、これまでの先行研究では触れられてこなかった「都市」と「消費」に注目した本文分析をおこなったことで、奎吉の心情変化には、舞台であ

る「都市」と、彼の行動としての「消費」が必要不可欠であることを明らかにした。以上、本稿での検討から、やはり、「泥濘」の中核部は、奎吉の内面描写ではなく、彼が「都市」を遊歩する中でおこなう「消費」であるといえる。

10 注vに同じ、442頁

※本文引用は、梶井基次郎「泥濘」(『梶井基次郎全集 第一巻』筑摩書房 平成11年11月)による。